

とくべつな、こ

平井 美里

エーヤナイ国には『魔法使い』という仕事  
がございました。エーヤナイ国の魔法使いが  
仕事としてすべきことは『人々を笑顔にす  
る』ということ、他に細かいことは何も決  
まっています。

もちろん、よその国の魔法使いと同じく、  
呪文なんかを唱えて、物を変身させることだ  
とか、火やら水を思うように動かすとかい  
ったこともいたします。けれども、そういつ  
たことができるだけでは、正式な魔法使いと  
は言えないのです。

とにもかくにも、エーヤナイ国で正式に魔  
法使いとして認められるには試験に合格する  
必要があります。そのうえ不思議なことに、  
その試験というのは魔法に関する知識を問う  
テストと試験官の面接だけで、実際に魔法を  
使った実技試験のようなものではありません。

した。

つまるところ、実際の魔法の力は、魔法使いになる際には、まったく関係ないのでした。

魔法使い試験が始まった昔、昔、大昔。『正しく知識を身につけているものは、魔法の力もそなわっておるものだ』と国一番の魔法使いが言ったそうです。

ところで、魔法使い試験に落ちた場合のことでですが、そういったときは、次の年の試験まで『魔法使い見習い』として魔法使いの弟子となり、本物の魔法使いのもとで過ごすことになるます。そうやって近くで本物の魔法使いに教わりながら力を養うのでした。

だいたいは五回六回と試験に落ち、本物の魔法使いになります。

ですから『魔法使い一年生』、と言っても、それなりに経験を積んだ者ばかりでございませぬ。……ええ、ほとんどは。

中には例外もいるのでございます。今年で言えば、コレデツカがそうでした。

コレデツカは魔法使い試験を受けられる十  
五歳になったばかりの女の子。試しに受けて  
みた魔法使い試験で、どういうわけか受かっ  
てしまったのです。受かってしまった、と言  
うより他に、ぴったりの言葉がありません。  
なぜなら正直なところ、コレデツカの魔法  
というのは、いたって『でたらめ』だったか  
らです。

コレデツカは基本中の基本、ほうきで空を  
飛ぶことすら出来ないのです。ところがおか  
しなことに、難しい書物で紹介されているえ  
らく複雑な魔法が使えたりもしました。魔法  
使いなら出来て当たり前前の魔法はてんでだめ  
なくせに、です。

どれだけすごい魔法が使えても、コレデツ  
カはできて当たり前前のことができないので不  
安でしかたありませんでした。

家に届いた『合格証書』を前に、コレデツ  
カは大きなため息を二つほど吐いて、ベッド  
にゴロンと寝ころびました。

「……どうしよう」

困ったな、とコレデツカは寝ころんだまま頭をかかえ込みました。魔法使いになってみたいと思った気持ちはウソではありません。そういう気持ちがあったから試験も受けたのです。魔法使いになってみんなを笑顔にするのはコレデツカの夢でした。

でも試験には落ちるだろう、と思っっていました。だってめったに初めて受けた年に受かったりしないと聞いていたのですから。落ちて、魔法使い見習いになって経験を積んでから本物の魔法使いになるつもりでした。

「やっぱり実際の魔法の力を見て判断しないとおかしいよ……。どうして私が受かっちゃったの？」

自分で試験を受けておきながら、自分が受かったことに文句を言いながら、コレデツカはベッドの上で足をバタバタさせました。

ふと横を見ると本棚が目に飛び込んできました。そこにずらりと並んだ『魔法使い』に

関する本を見て、コレデツカはまた大きくた  
め息をつきました。

「そりゃあ、知識だけはあるつもりだけど」

魔法使いの歴史や魔法使いの心がまえなど  
はスラスラと答えられても、コレデツカには  
実際に魔法を使ってあれやこれやする自信は  
なかったのです。

しかしながら多くの魔法使いを目指す者達  
がいる中、受かっておいて困るだなんてとん  
でもないことでした。コレデツカの家族も親  
せきも、めでたいことだと大騒ぎで、大喜び。

コレデツカの友だちも、すごい、すごいと  
自分のことのように喜んでくれました。

今さら、「やっぱり、やめた」などと言  
い出せるような雰囲気ではありません。

「私にできるかなあ……」

情けない声を上げ、そのままコレデツカは  
寝入ってしまった。

それからしばらくして、コレデツカの魔法

使いデビューの日がやってきました。

そしてそれは旅立ちの日でもありました。

魔法使いというのは、国に均等に必要な存在です。必要な場所に必要なだけ、送られることになっていました。魔法使い本人が、どこで働くか決めることなど出来ません。

コレデツカの家はエーヤナイ国の都にありましたが、コレデツカの働く場所は国の南の町と決まりました。都は海近く、磯の香りのするところでした。対する南の町は山に囲まれた土地。海どころか湖も池もなく、水と言えば細々とした頼りない川があるのみでした。

新人魔法使いとして南の町に派遣されたのは四人でした。任命式に出たコレデツカは、自分以外の新人がどんな人なのか、しげしげ見てみたり、話しかけてみたりしました。

そして分かったのは、やはりコレデツカが一番年若く、ずばぬけて経験の足りない新人魔法使いだということでした。残りの三人は五年だったり、十年だったりの魔法使い見習

いの経験をしっかりと積んだ、すぐにでも活躍できそうな新人らしからぬ魔法使いでした。

「みなさん、私はまったく経験がないので色々教えてください」

コレデツカがそう言うと、新人魔法使いの一人、アラヘンは

「何を言うんだい。ウワサは聞いているよ。君だろ？試験に一回で受かった優秀な特別な子って言うのは。そんな子に教えることなんて何もないさ」

と言い、また一番魔法使い見習いの期間が長かったらしいチャウワは、

「教えるって言ったって、私たちだって正式な魔法使いとしては初めてだし……」

と言い、最後の一人、ドナイは

「教わるって言うなら、僕らなんかより経験も力もあるベテラン魔法使いがいいんじゃないかな。ぼくも去年まで見習いとして学んでいたお師匠様に教えをこうつもりだしね」

と言いました。コレデツカ以外の二人は、

「そうだよ。見習い期間に教えていただいた  
師匠に教わるのが一番さ」

と納得した様子で、ふんふんと頷きました。

さらに、チャウワが、

「まあ、お父様やお母様にも聞けるしね」

と言うと、アラヘンとドナイも同じように頭  
を縦に振りました。どうやら三人には、家族  
に魔法使いがいるようでした。

「ああ、でも君には師匠なんていないんだっ  
け。なにしろ、一発で合格した特別な子なん  
だから」

これは困った、とコレデツカは腕組みをし  
ました。自分には師匠もいなければ、魔法使  
いの家族もいません。不安はどんどんつのる  
ばかり。

任命式で初めて具体的な仕事場も発表され  
ます。四人の新人魔法使いは、それぞれ町の  
東西南北に分かれて仕事をする事になりま  
した。四人はそれぞれの担当場所へと向かい  
ました。



コレデツカ以外は、ほうきにまたがるや否やスツと浮き上がり、サツと飛んでゆきました。他のみんなと同じように、取りあえずほうきにまたがっていたコレデツカはみんなの姿が見えなくなるとほうきからおり、それを手にしてとぼとぼと北に向かって歩き出ししました。

他の人たちが目的地に着く頃、自分はどこを歩いているだろうか、そんなことを思いながら歩くコレデツカの足取りはどうも重く、ますます差を広げているようでもありました。

どうにもくもりがかつた心持ちのときは、良くないことを考えてしまうコレデツカ。ただただ一人でまっすぐまっすぐ歩いていると、色んなことに腹が立ってきました。

「なにが『じゃあ、みなさん、今から仕事場に向かってください。ほうきで三十分ぐらいですからすぐですよ』よ！私はほうきに乗れないのに。確認もせず『はい、行ってください』ってひどいよ。ほうきに乗れない私は

どうすればいいの」

一つ文句を言うと、次から次へといやな気持が外へ飛び出しました。

「それにあの背の高い人！『優秀な特別な子だろ。教えることなんて何もないさ』なんて冷たすぎる。もうあんな人たちに頼ったりするものですか。魔法使いなんてみんなみんなきつと私にはいじわるなのよ。私が一回で試験に受かった特別な魔法使いだから。……ほうきにも乗れない私のどこが優秀なの。私なんて本当は全然、特別なんかじゃないのに」

そう、魔法使いなら当たり前、『ほうきに乗って飛ぶ』という行為、当たり前すぎる魔法であるがゆえにわざわざ書物には書かれていないのです。コレデツカは魔法をすべて書物から身につけたのです。書物にない魔法は、一つだってできません。それに親しくしている魔法使いもいません。これがコレデツカがほうきに乗って飛べないわけでした。

書物頼りのコレデツカは人から人へと直接

伝えられる魔法が、一つも使えないのです。

コレデツカはできて当たり前の魔法がほとんど使えません。数々の魔法の中でも簡単と言ってもいいもので、使えない魔法使いがいるだなんて誰も思わないでしょう。

ですからコレデツカについて言えば、一度で試験に受かったのもめずらしければ、口伝えの魔法が全く使えないというのもまためずらしいことでした。

「あ」

突然コレデツカは立ち止まり、長い道のりを歩くには邪魔になりそうなので、やけにかさ高な一冊の本をリュックから取り出しました。道ばたに座り込み、本をペラペラとめくり、あるページのところに来るとじつくりと読み始めました。パターンと本を閉じ、リュックにしまい込んだかと思うと、ほうきを両手でつかんで呪文を唱え始めました。

コレデツカがほうきにかけて魔法は、『命のないものに、自ら動く力を与える魔法』でし

た。普通なら一つのものにかける魔法というのは一つです。けれどもコレデツカは、まだほうきに向かって呪文を重ねました。『決して曲がらぬ魔法』。さらに『馬の速さで進む魔法』をも。

それからコレデツカは自分自身にも『表面を鉄にする魔法』をかけました。

そうそう最後にもう一つ。ほうきと自分両方に『ぶつかったものを元通りに戻す魔法』をかけて、準備は完了しました。

それだけやると、コレデツカはほうきの柄にしがみつき、ほうきを思い切り踏んづけました。するとほうきはお尻をたたかれた馬のように勢いよく進み始めました。まっすぐまっすぐ。とにかくまっすぐ。

いろんなものにバンバン、ドンドンぶつかりながら。表面を鉄にしたおかげでコレデツカはぶつかっても全然痛くありませんでしたし、ぶつけて壊したものだって魔法のおかげですぐさま元通りになっていましたので何も

問題ありません。

とぼとぼ歩いていたときとは比べものにならないくらいスピードでコレデツカは目的地に一直線に突き進みました。ほうきで空を飛んだ場合と比べたって、この速さならいい勝負なんじゃないかと思いました。でも、もしほうきで飛べたなら、物にぶつかることもないし、余計な魔法を三つも四つも重ねてかける必要ないのです。

私は、できそこないの魔法使い。

いくら試験に一度で合格しようと、いくらとっても難しい魔法が使えると、ほうきに乘れないコレデツカは自分に自信がありませんでした。

とにもかくにも何とか魔法使い事務所にたどり着いたコレデツカ。

そうぞうしい登場の仕方で行ってきたコレデツカを見て、すごいやつがやってきたぞ、と人々は思いました。まさか、ほうきで飛べないから編み出した方法だとは誰も思っ

いません。

魔法使いがほうきに乗れるというのは常識中の常識。ですから疑うべくもなくコレデツカも飛べるものと人々は思ったのです。わざわざ、他の魔法使いがやらないような方法でやってきたすごい魔法使いなんだと思いました。

少し離れたところから、自分を観察している町の人にぎこちなく頭を下げ、コレデツカは魔法使い事務所に入りました。

事務所の中には年も経験も重ねた貫るくのあるおじいさんの魔法使いがいました。

「よくやってきたね」

おじいさんは温かな声で言いました。コレデツカの本物のおじいさんのように優しそうな人でした。コレデツカはホッと表情をゆるめました。

「初めまして。よろしくおねがいます」

「待っていたよ。特別な子、コレデツカ。私はアルギだよ」

特別な子。その言葉を聞いた瞬間、コレデツカは、アルギのことがいやになりました。

「私、別に特別じゃありません」

コレデツカはアルギをにらみました。アルギは少しおどろいた様子で目をしばたかせました。

「私のこと、まだ何も知らないくせに、どうして会っていきなり特別だなんて言うんですか。言わないでください」

「気を悪くしたなら謝るよ。すまなかつたね、コレデツカ。君は特別な子だって聞いていたから、つい言ってしまったんだ」

コレデツカはアルギから目を外すと、くちびるをかみしめてうつむいてしまいました。ですから、そのときアルギが、どんな表情でコレデツカを見ていたかなんて、まるで知りません。

アルギは、来たばかりだから君も疲れているだろうし今日のところはもう休むといいと言いました。そしてこれからコレデツカのす

まいとなる事務所の三階に案内してくれました。コレデツカはアルギと目を合わさないまま、おつかれさまでした、と言って部屋に閉じこもりました。正直なところ、ここに来るためにたくさんの魔法を使ったのでコレデツカはくたくたでした。ですから、コレデツカはすぐに寝てしまいました。

次の日、目覚めたコレデツカが事務所に下りていくと、アルギがゆったりとお茶を飲んでいました。

「やあ、おはよう」

にこりと笑ってアルギは、コレデツカを手まねきしました。

「今日はわしといっしよに担当場所を見て回らんかね。早いうちに知っておいたほうが良からう。案内するよ」

「……それって、どれくらいの時間ですか」

「なに、ほうきに乗ればゆっくり回っても二十分ほどさ」

「いいません」



コレデツカはアルギから目をそらして首を大きく横にふりました。

「しかし担当する場所が分らんと不便だろう？」

「じゃあ、地図。地図をください。案内してもらわなくても地図があれば、自分でなんとかします」

「本物を見ながらいろいろ説明してあげたいんだがね」

「けっこうです。地図と本さえあれば、私はいじょうぶです」

そこでアルギはコレデツカに地図をわたしました。地図をもらったコレデツカは、

「じゃあ仕事をしに行ってきます」

と、すぐに事務所を出て行きました。

コレデツカが地図を広げながら町を歩いていると、道のはきそうじをしていたおぼさんが突然話しかけてきました。

「あんた、新しくやってきた魔法使いでしょう。昨日は、えらくはでな登場だったじゃない

いか。さすがうわさされていた特別な魔法使  
いだね。これからいったいどんな特別な魔法  
で私らを笑顔にしてくれるのか、楽しみにし  
ているよ」

また、『特別』。聞きたくない言葉がおば  
さんの口からも飛び出してきました。

「私、急いでいるんです」

コレデツカはおばさんからにげるように走  
り出しました。

ふりかえっても、おばさんが見えないとこ  
ろまでくるとコレデツカはまた歩き始めまし  
た。しばらくすると、どう見ても困っている  
男の人が木にもたれて頭をかかえていました。

「あの、どうかしましたか」

コレデツカが声をかけると、男の人はぱつ  
と目をあげました。

「あんた、魔法使いかい。いいところで出会  
った。どうか私を助けてくれ」

男の人はどこかで家のかぎを落としてしま  
ったそうでした。

「あんたのほうきに乗せていっしょに探してくれないか」

「私、今、ほうきを持っていません」

「事務所はすぐそこだろう。取りに戻ってくればいいじゃないか」

「違う方法でお手伝いします」

「いいや。ほうきに乗せてくれ。一度ほうきに乗って飛んでみたかったんだ。あんた、特別な魔法使いなんだろう。ほうきの二人乗りくらい簡単だろ」

二人乗りなんて、とんでもない。自分一人だってほうきに乗れないコレデツカ。困ってしまったって男の人をほうってかけだしました。

少ししたところに、ほうき屋がありました。

そこにはいろいろなほうきが置いてありました。コレデツカがじいとながめていると店の奥からほうき屋の主人が出てきました。

「おや、君は新しい魔法使いだね。いいところで出会った。実は君にプレゼントがあつてね。少し待っていておくれ」

そう言って店の奥に行ったおじさんは、かわいらしいピンク色したほうきを持って戻ってきました。

「これを君にあげたくてね。特別な魔法使いは特別なほうきを持ってなきゃ」

おじさんが差し出してくれたほうきは、とつてもすてきでした。けれどもほうきでした。それを使って飛んでいるところを見せておくれと言われてコレデツカは思わず

「ほうきなんていりません」

と大声を出してまた走り出してしまいました。

とぼとぼとぼとぼ、どれくらい歩いたでしょうか。気がつけばコレデツカはひと気のない森にやってきていました。

「どうしよう。私まだ、だれのことにも笑顔にしない」

コレデツカはためいきをつきました。

「それどころか、きつとたくさんの人をいやな気持ちにさせてしまったわ。私なんて魔法使い失格よ」

「おねえさん、魔法使いなの？」

だれもいないと思っていたのに、どこからとつぜん声が聞こえました。コレデツカはびっくりして、今にも出そうになっていたなみだが引っ込みました。

「だれ？どこにいるの」

きよろきよろ見わたしてもだれの姿もありません。

「ここだよ、上。木の上にいるよ」

見てみると五才くらいの小さな男の子が木の枝に座っていました。手には小さなほうきもあります。

「そんなところで、何をしているの」

「ほうきで飛ぶ練習だよ。どうすればいいかわからないから高いところからほうきにまたがって飛びおりてみようと思って」

言うなり男の子は木から飛びおりました。

もちろん飛べてなんかいません。男の子は落ちてきます。コレデツカはあわてて、地面をふかふかにする魔法をかけました。

おかげで男の子はけがをせずにすみました。

「わあ。すごい、すごいよ、おねえさん。さすが魔法使いだ。ねえ、ぼく、どうすればほうきで飛べるようになるかな」

「どうすれば飛べるかなんて、コレデツカだつてどれだけ知りたいたいことか。」

「お姉さんは、どうやって飛ぶか知ってる？」

「知らない」

「思わず本当のことを言ってしまった。がっかりするかしら、それともばかにするかしらと、こわごわコレデツカが男の子を見ると、とてもうれしそうに笑っていました。目が合うと男の子はきゅっとコレデツカの手をにぎりました。」

「じゃあ、いっしょに飛べるようになるよ」

「でも、どうやって？」

「他の魔法使いはどうやって飛べるようになるの？」

「飛べる魔法使いに教えてもらうのよ」

「だったら、そうしようよ。教えてもらおう」

「いやよ」

コレデツカは男の子の手をふりはらいました。

「どうして？」

「だって私はもう正式な魔法使いなのよ。それなのに飛べないなんてはずかしすぎるわ。みんな私のこと、特別な魔法使いって思っているのに、ほうきで飛ぶこともできないなんて知られたらきつとばかにされちゃうもの」

「ええつと、それじゃあ、お姉さん、十日後にぼくが飛べるようになってるか、見に来てよ。ぼく、他の魔法使いに教えてくださいますってお願いして教えてもらってくるから」

「たった十日で飛べるの？」

「知らないけど、とりあえず、十日後またここに来てね」

そういって男の子は森の奥に走っていきま

した。

それからきっかり十日後、コレデツカは男の子と出会った森にまたやってきました。

約束通り男の子は森にいました。コレデツカの姿を見つけると、男の子はほうきにまたがりました。そうしてすうっと浮き上がったのです。こぶし一つ分くらいの高さではありましたが。

「すごいでしょう」

男の子はコレデツカの前でほうきからおりと胸をはりました。

「どうやって飛べるようになったの」

「アルギさんに教えてもらったんだよ」

「どうすればいいの」

コレデツカが知りたいのはだれに教えてもらったかではなくて、どうすれば飛べるようになるかです。それなのに男の子ときたら

「アルギさんに聞けばいいと思うよ」

と、教えてくれません。

「いじわるしないで教えてよ」



「ぼくじゃ、だめなんだよ。お姉さん、今ぼくに頼むのに勇気はいらないでしょ？」

「勇気？」

「そう。くわしいことは言えないけど、ほうきで飛ぶのには勇気がいるの。がんばって。お姉さんもぜったい乗れるようになってよ」  
それだけ言うと、男の子はまた森の奥に消えていきました。

取り残されたコレデツカは、どうしよう、と思いました。あんなに小さな男の子がたった十日でほんの少しとはいえ飛べるようになったのに、自分がまだ飛べないなんて。

それにこの町にやってきてから、町の人ともアルギともうまくやれていませんでした。ほうきに乗れないせいで自信がないコレデツカは、みんなとかかわるのをさけてしまっていました。

「ほうきに乗るのには、勇気が、必要」

男の子の言った言葉を口にして、コレデツカはこぶしをにぎりしめると力強く歩き出し

ました。

事務所にもどってきたコレデツカは、まっすぐアルギのところに行きました。

「あの、私に、その、えっと」

ほうきに乗れないと伝えることがはずかしくって、やっぱりどうしてもうまく言葉になりません。つまりながら言うコレデツカをアルギはせかすことなくじっと待っていました。

「ほうきに、乗る、方法を、教えてほしいんです。私、まだ、ほうきに乗れません。お願いします」

「よく言えたね」

アルギは大きなしわしわの手でコレデツカの頭をやさしくなでました。

「私がほうきに乗れないこと、おどろかないんですか。試験に一度で受かった特別な魔法使いなのに、そんな簡単なこともできないのかって」

アルギはふふふ、と、やわらかに笑みをうかべただけで、何も言いませんでした。

それからコレデツカはほうきに乗る方法を教わりました。ほうきに乗るのは基本中の基本だからこそ、「自分から教えてください」と本気でお願いしないと身につけられないしくみになっているのだよ、とアルギは教えてくれました。それから、すでに空飛ぶほうきになっているほうきから、ただのほうきに命をふきこむのだそうです。

ほうきをもっておいで、とアルギに言われてコレデツカはあのピンクのほうきのことを思い出しました。コレデツカは事務所を飛び出して、いちもくさんにほうき屋に向かいましました。

ほうき屋の主人にこの間はごめんなさいとあやまって、ピンクのほうきをもらいました。

きつと大切にしますと約束すると、おじさんほうれしそうに笑ってくれました。

そのほうきにアルギの空飛ぶほうきから命をもらいました。アルギと練習にはげんだコレデツカは三日もしないうちにほうきで飛べ

るようになりました。

「アルギさん、私飛べるようになりました。ありがとうございますございました」

空高く浮かびながら、コレデツカはアルギに頭を下げました。

コレデツカの真横にやってきたアルギは「いい笑顔だ、コレデツカ。ようやくわしはお前さんを笑顔にできたようだな」

「私？」

コレデツカは目をパチクリさせました。

「そうさ。魔法使いの仕事は人を笑顔にすること。お前さんがこの町に困った顔してやってきてから、わしはずっとお前さんを笑顔にしたかったのさ」

「私、魔法使いですよ」

「魔法使いが魔法使いを笑顔にしちやいかんなんてきまり、どこにもないだろう」

「でも、そんなの聞いたことありません」

「ふふふ。わしは特別頭がやわらかいのさ」

「特別……」

「ああ、そうだよ。どうもお前さんは特別って言葉にこだわっているようだが、『特別』があることなんて、実のところたいして特別じゃないさ」

特別が特別じゃないなんて頭が混乱します。

「たとえば、コレデツカ。花屋のおじょうさんは特別たくさん食べるし、魚屋のぼうずは特別弟にやさしい。それからとなりの家に住むばあさんは特別、玉ねぎスープをうまく作るぞ。あっちにもこっちにも、だれにもかれにも特別はあるのさ」

コレデツカは何も言えないまま、アルギの話をしっと聞いていました。

「だが、そうだね、コレデツカ。自分の特別を大事に思えたら人生はきつともっと楽しいよ。だいたい自分の特別に悩まされるなんてばからしいし、もったいないことさ」

「私の、特別」

「試験に一度で受かったことがお前さんの大事にしたい特別かい？」

ふるふるとコレデツカは首をふりました。

「私、まだ今はそれが何か分からないけれど、ちゃんと自分で大切にできる自分の特別を作りたい」

「きつと君ならできるさ、コレデツカ」

アルギは笑顔でした。コレデツカも笑顔になりました。

それから、ほうきに乗れるようになったコレデツカが一番にしたことは、かぎを探していた男の人を見つけて、以前置き去りにしたことをあやまって、ほうきに乗せてあげることでした。初めてほうきに乗せてもらった男の人は、笑顔になりました。

できることが一つ増えたコレデツカは、自信を胸に、人々を笑顔にするため今日も笑顔で空を飛んでいます。

ところで、最後に特別なひみつをお教えしましょう。コレデツカとほうきに乗れるよう

になる約束をしたあの少年、実はアルギが魔法で変身した姿だったのです。

コレデツカにはないしよですよ。